

第五章

それは定期的に共用部の掃除をしてくれている清掃員の高齢男性でした。私は唖然としました。なぜ、この人まで同じ行動をし始めたのか。

連呼しながらも普通に掃除をしており、恐怖というよりはとてつもない気持ち悪さを感じたことを記憶しています。

気になりながらも普段通り自分の生活を送っている中、私の大学時代の同級生から突如連絡がありました。

奈良県の方で建築事務所を開業したので手伝いをしてくれないかというものでした。友人はすでに1級建築士として働いており、私が勉強を再開したことも伝えていたので親切に声をかけてくれたのです。

私は考える間もなくすぐに了承し、引っ越すことを決意しました。それから約1か月程度でアパートを退去し、奈良での生活を始めました。

思いもよらぬ急な進展に心機一転し、頭からモヤが消えたような感覚を覚えています。実務も経験できたことから勉強にも身が入り始め、ようやく次の試験に合格もできました。そして友人の所で共同事務所としてそのまま継続して働かせてもらうことになったのです。仕事も安定な状態が続き、ようやく私の生活も落ち着いてきた頃でした。

自宅で何気なくテレビを見ていた時、ある病気について特集がされておりました。

それは「強迫性障害」という病。

初めて耳にした病気なのですが、その症状の一つ、不潔恐怖というものが私の以前の潔癖症と似たようなものであり私はテレビに釘付けになりました。

奈良へ来てからはほぼこの症状もなく、気づけば以前通りの生活を送っておりました。また驚くことに、強迫性障害には確認行為という症状があり、それが隣の201号室の親子のドアの開け閉めの確認と似た症状なのです。

この病気の発症率は約2-3%だといいます。同じ病気の人が隣同士で並ぶことがあるものか。そう考えていた時、ふと203号室の方の事も思い返しました。

毎朝決まった時間に掃除機をかけ、決まった時間に必ず帰宅する、休日は自宅にひきこもる。強迫性障害の方は不安な状態を脱したい為ルーティンを習慣にする方も多いと紹介されていました。この方もそうだとしたら、私の知る限りで3部屋並ぶことになります。発症率から考えてもありえません。

私はオカルト的なことには全く関心はなく生きてきました。しかし、こればかりはいくら考えても理解ができない不思議な感覚に陥りました。

本当に全員が強迫性障害を患っていたのか、そうだとすると何故そうなったのか・・・